

# 三國港を救った オランダ人技師、 エッセル



G.A. エッセル肖像  
(淀川資料館蔵)

三國（坂井市三國町）は、『日本書紀』や『続日本紀』にも登場する古い港町。江戸時代後期から明治時代にかけては、特に北前船の寄港地として知られます。福井県嶺北地方の河川が九頭竜川に集結し海へ注ぐ場所に位置するこの港は、越前の一大経済拠点だったのです。しかし、三國港は河口港ならではの課題を抱えていました。九頭竜川上流からの土砂がたまりやすかったのです。かつて商港として繁栄した港は、現在の三國漁港よりも1〜2キロ川上にありました。港の水深が浅くなつては大きな船が入れず、商

売ができません。地元の人々は、何とか港を改修して、賑わいを維持したいと政府に訴えました。

そこで招へいされたのが、オランダ人土木技師 G. A. エッセルです。エッセルは明治9（1876）年、三國を訪れ、港を調査。九頭竜川河口右岸に突堤を、対岸の新保には水中にT字型の水制を設け、川幅を狭めて水の勢いを増し、緩やかに湾曲した突堤で水の流れを導き、土砂とともに日本海へ流すという改修計画を立てます。この計画はデ・レイケに引き継がれ、明治11（1878）

年に着工。明治15（1882）年、三國港突堤は完成しました。日本の近代土木史上重要な遺構として、国の重要文化財に指定されています。



突堤工事の様子  
(明治12(1879)年頃)

さて、オランダに帰国したエッセルは、後に自分の足跡を二十数冊の回想録にまとめています。その中の第二巻には、日本行きを希望したきっかけから帰国途中の船旅までの出来事が記されています。

日本を離れて三十年以上も後に書かれたこの一冊には、三國での思い出も多く綴られています。九頭竜川の左岸側に広がる松林と芳しい花々の咲き乱れる砂丘。東尋坊の海女たちが採ったサザエやナマコ、アワビなど。聖なる島 雄島では、革製品を身に着けて足を踏み入れることは許されず、藁製のサンダルにはきかえたこと。

約半年という短い滞在にも関わらず、エッセルが三國の風物について、これだけ多くのことを書き綴っていると、よほど印象深い

土地だったようです。

ちなみに、トリックアートで世界的に知られる版画家 M. C. エッシャーは、G. A. エッセル（エツシャー）の五男にあたります。そのゆかりから、過去に「みくにトリックアートコンペ」が開催されたこともありました。エッセル（エツシャー）は、父子揃って三國の地に大きな足跡を遺しています。

## 関連史料・ゆかりの地

### 三國港突堤



明治時代に造られた突堤は中央までの511メートルで、その先は昭和期に継がれました。右岸に広がる三國サンセットビーチは、排出された砂がたまってできた三國港突堤の副産物だといえます。

参考資料等

みくに龍翔館編『第21回みくに龍翔館特別展図録「明治三大築港展」』  
龍翔館（三國町郷土資料館）編『蘭人工師エッセル 日本回想録』三國町

執筆・協力

みくに龍翔館 学芸員 釣部 由紀子